

Le Corbusier

2008年度 フランス文化コース選考者報告

E.M.

はじめに

ル・コルビジエ(Le Corbusier、1887～1965)は、フランスで活躍した建築家としてよく知られている。しかし私とコルビジエの最初の出会いは絵画を通してであった。私はパブロ・ピカソについて研究していて、ダリ、ピアズリーといったような個性の強い絵画を描く画家に興味をもっている。ある日、図書館でそういった画家を探していたときにコルビジエと出会ったのである。コルビジエの絵はとても個性的で目を惹く。特に1938年に制作された「脅威」(Menace)に描かれている馬の表情は、ピカソが「ゲルニカ」などで描いた馬に酷似している。コルビジエの絵画とピカソの絵画がとても似ていることがきっかけで、コルビジエに興味をもったのである。

さらに運のいいことに、私が所属している後藤先生のゼミで、コルビジエ(主に都市計画)について勉強している。その中で、コルビジエの建築作品を目にすることができた。私は、当時のフランス建築には見ることのできないような、ボリュームの自由さ、軽さに驚かされた。

それから、コルビジエは私の興味を惹いて、放さなかったのである。ピカソと酷似する絵画を描くコルビジエが、建築でその感性をどう表現したのかとても興味深かった。そこで、今回の研究旅行を計画した。

■国際大学都市(パリ)

コルビジエの絵画と建築を比較してみると、両者の関連性が最も明確に現れているのは、その色使いである。その色は、彩度の低い色彩から戦後のはっきりした色彩へと年代とともに変化する。「スイス学生会館」と「ブラジル学生会館」の外観を比較してみても、その差がはっきりとわかる。

国際大学都市はパリの南、モンスーリ公園の近くにあり、内部には37の宿舎があって留学生がここで生活している。国によって宿舎が分かれていて、その中にある「スイス学生会館」と「ブラジル学生会館」がコルビジエの作品である。とても広いところだったので、入り口から遠くにあるこの2つの館をすぐに探し出せるか不安であったが、歩き回っていて目にとまったのはやはりコルビジエの作品であった。そのシンプルでスタイリッシュな建物は、他にはない独特の雰囲気をもっていた。



◎ スイス学生会館（1930）

◎ブラジル学生会館(1954)

最初にたどり着いた「スイス学生会館」はコルビュジェが初めて手がけた公共建築物である。ガラスを多用した建築を手がけるのに並行して、レンガや木、石といった自然素材を用い、それらの肌理を生かしそのまま見せている。ホール棟の湾曲した外壁が乱石積みになっていて、ホール内部の壁画と対比しあっていた。この時期の建築の目地の広いレンガ積みやガラス・ブロックを見ると、一つ一つのレンガが細胞のようにも見え、目地は繰り返し描かれた魚網の網目を思わせる。絵画において幅広な線が用いられるのも、広めの目地が多く見られた30年代に多い。網目模様は転じて、小石をはめ込んだコンクリート・パネルへと展開したと思われる。

スイス学生会館に入るとすぐこの壁画が目に入る。応接間の壁画は1933年に壁写真の代わりとして描かれた。1945年、過度の日当たりを制限するために、部屋のガラス壁を改築し南側の建設を改修。1957年にイスをはじめとするインテリアを揃え、部屋に新しい多色装飾がなされた。外観がシンプルなだけに、この壁画を目にするとコルビュエの中のまた違った部分が見えたようであった。また、インテリアも色みのないシンプルなものに統一されているため、壁画の色がきわだち、よりカラフルで鮮やかに見えた。

他にも、廊下の机やイスにもコルビュエらしい絵が描かれており、トイレの壁や部屋のドアには原色が用いられていた。学生の部屋のインテリアはさらにシンプルなもので、黄色がかった淡い白をベースとした壁、椅子、カーテンに、木素材の机やタンス、窓枠がほどよく馴染んでいた。イスは硬くて小さいので、ソファーに座り慣れている私たちには不向きな印象を受けた。しかし広い机の前には大きな窓があり、勉強に行き詰ったときに目の前に広がる緑いっぱいの景色が十分に癒してくれそうだった。

コルビュエの建築を語る上で忘れてはいけないのが「近代建築の5原則」である。この時期にコルビュエは彼の方法を一般化して、これを定式化した。すなわち「①ピロティ②屋上庭園③自由な平面④水平連続窓⑤自由な立体」である。この学生会館はそのすべてを満たしており、しかもコンクリートの人工地盤という都市的発想が技術的に獲得されている。ピロテ

ィが鉄筋コンクリートのプラットフォームを支え、その上に、鉄骨構造の新しい方法によって建物の主体部分が載せられている。すなわち、鉄筋コンクリートのピロティの上部に、工業化された鉄骨構造による「箱」を浮遊させたかのような構成になっている。よくこの数本のピロティだけで、大きな住居部分を軽々と支えることができるものだ。近くで見ると本当に不思議でたまらなかった。

次にブラジル学生会館を訪れた。その表情は30年の変化をさまざまとみせている。ブラジル学生会館を目の前にしたとき、スイス学生会館に比べ住居部分のコンクリートが重々しく見えた。比較してみると明らかだが、ピロティもしっかりしたものになっているように思う。さらに、外観にも色が現れていた。緑、青、黄といったブラジルの国旗の色が大胆に使われている。この戦後の作品の特徴として、コンクリートの塊としてのボリューム建築であること。いたるところに非常に強い原色が用いられるようになることが挙げられる。白を中心とし、白を際立たせる色彩から、コンクリートのグレーと対比される原色の色づかいへと変化しているのである。

中へ入ると、あちこちに原色が散りばめられていた。赤、青、黄、緑…。黒と白をベースとしたロビーの中で喧嘩することなく、柱、壁、カーテンに鮮やかな原色が用いられていた。その色彩方法は必ず壁単位であり、一つの壁面をストライプのように塗り分けることはせず、壁面ごとに塗り分けることで、個々の面が独立した存在となり、境界が際立って見える効果を生み出していた。奥に進んでいくと、そこには庭があり、大きくて丸い創作物が飾られていた。銀色の隙間から見えるきれいな青が絶妙な割合で見えていて、色の使い方が本当にすばらしいと思った。色があることで、パーツが独立し、互いに反響しあっているように感じられる。学生の部屋はとてもカラフルだろうと楽しみだったが、部屋を見ることはできなかったので少し残念であった。また、この時期の絵画も、建築同様の明快で強い色彩が用いられている。しかも、その色彩は輪郭線を見捨てて色面を置くような描き方に変化している。建築と絵画どちらを見てもその時期のコルビジエの特徴が表れているのでとても面白い。

■サヴォア邸(ポワッシー)

パリ市内から20数km西のポワッシー(Poissy)という小さな町に建っている「サヴォア邸」は、コルビジエの20世紀の建築において最も名高い建物と言える。パリ市内からは離れたところにあるが、コルビジエの代名詞と言っても過言ではないサヴォア邸を見に行くのだと思うと、とても気持ちが高ぶった。オペラ・ガルニ



エ駅(Opera Garnier)から高速地下鉄 RER A 線に乗り、終点のポワッシー駅(Poissy)で下車し、駅からサヴォア邸まではバスが出ているので、それで向かった。フランスでバスに乗るのは初めてで無事に着くことができるか不安であったが、コルビジエの本を持っていたからサヴォア邸の近くのバス停に着くと、乗客の方々が「サヴォア邸を見たいのならここで降りるんだよ」と親切に教えてくれた。現地の方々は地下鉄でも道端でも本当に親切に道案内をしてくれるので、目的地に行くのにとっても助かった。お礼を言ってバス停を降りると、「Villa Savoye Le Corbusier」という矢印の形をした看板がすぐに目についた。ついにサヴォア邸を見ることができると足早に矢印の指す方へ向かうと、そこにはサヴォア邸のミニチュア版ともいえるような門番小屋が建っていた。特徴はつかんでいるものの、どことなくプロポーションが悪い気がした。林の中の砂利道を進んでいくと、木々が開け、急に明るくなる。緑の芝生の上、青空の下に真っ白の「サヴォア邸」の姿が見える。細いピロティに支えられた、パリの重々しい町並みからは想像もつかないような軽々しい造りに、思わず駆け寄った。これがあの「近代建築5原則」の集大成だと外周を何度も周り、さまざまな角度から外観を楽しんだ。

玄関扉から入り、最初に目に付くのが2階(住居階)へと上がる「スロープ」と「回り階段」である。スロープは玄関扉の直線状に真っ直ぐに伸びていて直線を美とするコルビジエの考えに改めて共感させられた。対照的に回り階段は、そのスロープを棒に巻きつけたような曲線になっていて、その計算されたカーブの角度がとても美しかった。私は回り階段を左手に眺めながら、スロープで2階へ上ることにした。そのスロープは、2階の外にある「空中庭園」から注がれた多くの光と白い壁が反射していてとても明るかった。

上り終わるとすぐに広間にたどり着く。多くの窓があり、空中庭園との境は全面ガラスで造られているため、開放的で広々としていた。林の中に建っているため、窓から見える緑の景色がサヴォア邸の白と対比して鮮やかに見えた。広間にはさまざまな種類の椅子があり、どれもオシャレで独特のデザインをしていた。中でも長椅子のデザインが好きで、座ってみたが意外と硬くて、ゆっくりできそうではなかった。安楽椅子は名前の通り座り心地がよかった。

キッチンに進むとまず、機能的な食器棚がある。広間側とキッチン側どちらからも食器を取れるようになっていて、とても広い。調理台は白磁器質タイルが貼られていた。セーヌ河へと至る眺望を楽しみながら洗い物を行えるように、流し台の前には大きな窓が設置されている。バスルームにもキッチン同様の白磁器質タイルが貼られている。寝椅子に貼られたグレーのガラススタイルとバスタブのトルコブルーのガラススタイル、奥のオレンジの壁と黒茶色の扉の対比が印象的だった。トイレに背を向けて入るのか、逆なのか定かではないが、日本人の感覚からいうと、あまり入りたくないというバスルームではなかったように思う。

空中庭園に出て、屋上庭園を見わたす。空が曇っていたのが残念だが、本来ならば青、白、緑という色の対比を十分に楽しむことができる空間であった。3階(屋上)へ続くスロープを見ると、その背後のガラス越しに回り階段が見える。それはまるでピュリスム絵画のようで、建築と絵画の共通点を見つけた気持ちになった。屋上庭園へ上ると、正面にセーヌ河方向を見下ろす開口部がある。そこから覗く景色は、まさに白の額縁にはめられた自然の芸術であっ

た。その景色を目に焼き付けながら、回り階段を下り1階へ戻った。コルビジエについての資料部屋があり、そこにメッセージを書き込むノートが置いてあった。開いてみると、意外にも日本人が多く訪れていることに驚いた。私と同じようにコルビジエの作品が見たいと思いフランスまで来た日本人がいるのだと思うと、嬉しくなった。

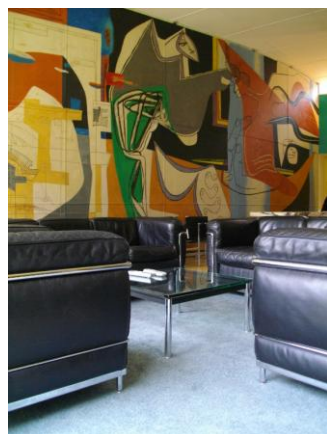
おわりに

初めて海外に行くことができ、本当に嬉しく思っています。滞在期間は5日間という短い期間でしたが、朝早くから日が落ちるまで十二分にパリを満喫して来ました。実際に訪れるのと本で見るとは大きな差が生まれることを実感する、本当に意味のある旅になりました。ピカソ美術館を訪れることもできたので、これからの研究に生かしていこうと思います。

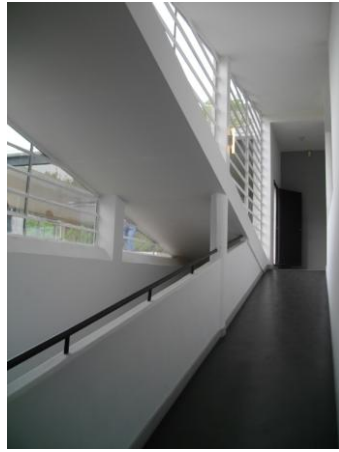
最後に、研究旅行制度を利用させていただき、このような貴重な体験をする機会を与えて下さった先生方に、この場を借りてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

参考文献

- ・ル・コルビジエの生涯 S・V・モース著 住野天平訳
- ・Villa Savoye 山名善之 Text
- ・ル・コルビジエ 建築とアート、その創造の軌跡







■研究旅行要旨

E.M.

今回の旅行のグループでのテーマは、「ル・コルビジュエを歩く パリ」である。今、後藤先生のゼミでコルビジュエの都市計画について学習している。これをテーマにパリを歩くことで、文献に出てくる地区の名前を頭の中の地図でイメージできるようになり、今まで文章や写真の中でしか見たことのない世界がもっと身近に、わかりやすくなる。個人の目的・テーマは、「ピカソと酷似する絵画を描くコルビジュエが、建築でその感性をどう表現したのか実際に見ること」である。主に色使いを考えながら、スイス学生会館、ブラジル学生会館を訪れ、形としてはサヴォア邸を訪れた。コルビジュエの作品は他に、クック邸、ナンジュセール・エ・コリ通りのアパート、デルニジアン邸を訪れた。ピカソについて卒論を書こうと考えているので、ピカソ美術館、ポンピドゥーセンター(国立近代美術館)も訪れ、いくつか資料を集めた。